

るからにはかならない。

しかし真に森林組合が林業生産を向上させ、それをとりまく農山村民のためのものであるならば、物を媒介とした人と人との関連を追究することに森林組合問題の中心点がなければならない。

このようにみえてくると、森林組合問題は従来の資源政策的な考え方だけでは到底その総合的把握ができないことがわかる。森林組合問題は振興3ヶ年計画とそれに続く第2次振興計画という実践的な飛躍にもかかわらず、理論的にはより広範な、より系統的な武装が要求される重要な段階にあるといえよう。

結論的に云えば森林組合のもつ停滞性とは、資本主義の外圍的条件の中での森林所有者による林野の所有と経営を特徴的に明かにし、それと組合との関係をはつきりさせることによつて再検討されるべきである。

このような観点から森林組合のもつ特性を一言にして云えば、組合員ないし一般森林所有者のもつ農民的性格、ユンカー的性格ないし資本家的性格として集約的に表現される。特に土地所有と資本（経営）との未

分化に着目した場合、資本制生産の典型的発展をみせるイギリスやアメリカに対比して強調されるところのユンカー的性格は、その所有と経営の特性に対応して森林組合をも大きく規定している。

もちろんひとくちにユンカーの経営と云い、土地所有と資本との未分化といつても、いわゆる新炭林経営の如くそこに殆んど資本投下のみられない完全な意味での地主的経営があるし、人工林経営の如く相対的に資本の比重の高い林業経営も存在する。これらのちがいは当然森林組合のあり方に反映するであろう。またこれに対応する農民的林業は、地代、利潤、労賃がまつたく未分化のままの小規模経営であつて、森林組合の動向を決定するもう一つの柱である。またこれらとは別にいわゆる3者造林にみられるような資本制的林業の萌芽も見落としてはならないであろう。

以下林業のユンカー的性格と森林組合との関連に中心テーマをおきながら、順次それぞれの範疇での林業の特質とそれらの相互連関性を森林組合との関係において類型的に把握したい。

## 79. 林業作業における職場集団研究の方法について

### 一 国有林野事業における林業機械化

#### に伴う作業集団の編成に関連して 一

九大農学部 中 島 能 道

#### まえがき

近来、林業作業の機械化を契機として、国有林では現場の作業集団を、新しい性格を持たせつつ再編成する必要に迫られているが、有効にその目的を達成させる方法、及び再編成後に起り来る新しい標準工期設定の問題について感ずるところを述べる。

#### 1. 国有林野事業の標準工期調査について

国有林野事業の経営合理化を重要な問題として取上げ始めたのは、昭和22年の林政改革以来のことで、まづ無駄を省き生産の能率を高めること、それにはテラ・ギブレス方式による作業改善と、それに基づく客観的課業の設定が急務であるとし、各種作業の標準工期調査が強力に推進されたことは周知の通りである。しかし各営林局で取纏めた標準工期表は、林野庁の調査手順及び方法の統一等に関する再三の指導にも

拘らず精度において区々であつたり、或いは従来の実績や現場での経験的な工期の値とかなり違つていたりして初期の目的通りに利用出来ないものもかなりあつた。従つて現行事業に適用するには、テラ・ギブレス方式による合理的な作業研究の結果得られた筈の標準工期表を、実績工期との勘案の上で補正簡易化し各局ほぼ同規格のものを作成して現場に適用しているのが現在の段階と云えるであろう。

#### 2. テラ・ギブレス方式の問題点

国有林野事業の合理化を目指して採入れられたテラ・ギブレス方式による所謂「科学的管理法」には少なくとも次の3つの問題点が考えられる。(i) 科学的管理法が、人間の作業を個々バラバラな要素動作の寄せ集めであると考え、個体の作業過程に含まれる有効な要素動作のみを単純に結合させることによつて、最も

合理的な作業方法が設定出来るとする。(ii) 1つの作業状態が刺激対反応と云う過度に単純化された因果関係において把握され、作業の担い手たる作業員自身の主観的要因が全く考慮されていない。(iii) 労働が、あくまでも個々の労働者のみについて考えられていて労働者が集団を形成した場合のことを考えない。(i) は作業員の適性とか知能とかに基づく、作業全体に対する内部構造の無視であり、(ii) は極端な人間機械観、(iii) は集団行動に見出される社会的助長傾向とか社会的価値低下効果及び水準化効果など、集団心理学的原則の否定である。従つて国有林当局の標準功程表調査が、技能中層な作業員を対象とする個人中心的調査に止まり、事業の特殊性(広大面積、事業内容の複雑さ、作業環境条件などによる作業方法標準化の困難性など)にも拘らず、科学的管理法中心主義であつたことは反省さるべき点であろう。

### 3. 考 察.

——応用社会心理学の職場集団研究への適用——

目下、国有林では林業機械化が唱導され、従つて機械化に伴う新しい作業方式、作業組織の設定が重要な問題となりつつある。これには当然、作業の担い手たる作業員集団の編成がとり上げられ、次いで編成後の集団に関する標準功程が研究されるであろう。

ところで、林業機械化は、作業環境その他の制約上ベルト・コンベア作業に見られる如き、作業員に対し完全に単純化された要素動作の繰返しを強要することはあり得ない。むしろ作業員に対して筋肉作業の他に

多分に知能部分の比較的高度な有機的結合状態を、適応の形で要求する。従つて先ず、機械操作には一定の適性が要求される。適性に関する心理的技術を取扱うのは個人心理学の分野である。かつて林野庁が労研の協力を得て行つた林業労働者の適性検査結果によると一般産業のそれに比して、知能的に低位を占める人々から形成されていることが知られる。

これらの人々を社会心理学的な考慮を抜きにして編成した作業員集団に対し、功程の標準値を決定することは不可能に近い。従つて先づ個人心理測定技術に則つて、林業的な水準に引直した検査法を確立させ、林業労働者集団の知能的適性の分布を把握し、導入される機械の性能に対応し得る適性の人々を選ぶことが必要である。次に、一定の適性を持つた個人が作業員集団として編成された場合、望まじき集団規範が公式、非公式組織を通じて形成されるべく、また結合力、職場士気の高められるべき条件がインフォーマルな組織として如何に作用するものであるかを、集団研究の技術(集団心理学、ソシオメトリー、集団力学など)を適用して、林業作業のなされる職場と云う社会構造において人間関係の姿を把握し、その適否を生産性の上から検討した上で集団編成条件を決定しなければならない。

新たに編成された作業員集団の標準功程を設定する場合無分別に再びテラ・ギルプレス方式が用いられてはならず、社会心理学的考慮を加味し、先述のテラ・ギルプレス方式の3問題点の欠陥を補いながら、絶えざる調査研究が続けられねばならないであろう。

## 80 広葉樹の伐木から搬出までの作業に関する研究 (I)

—— 時間分析と生理的負担の考察 ——

九大農学部 中島 能道・吉良今朝芳・広田 凱則

### I 目 的

経済的にも技術的にも林道をつけてまで伐採木を搬出することは不利であり、と云つて人力や畜力を以てしては搬出不可能と云うが如き、小面積且つ地形急峻と云つた類の林地を対象とし、その伐木から搬出までの作業研究を行い、小規模経営者が一家の家族労働を以て、或いは数人共同でこの種の作業を実施する場合の参考に供することを目的とする。

### II 調査地の概要

昭和35年8月、九州大学粕屋演習林が、林種転換のために既生立の広葉樹を皆伐し、樹材種によつて、坑木材、パルプ材及び製炭材として市場に出すべく、地元民に伐木、造材、搬出し、木馬運材及び索道運材と一連の作業を請負わせ、トラック運材の起点たる下土場まで搬出させた作業の調査である。対象林分は福岡県粕屋郡九大演習林13林班「は」小班から「と」小班にまたがる、主としてシテ類の多い広葉樹林で、総面